

史層を

第11卷

叢書  
掘る

赤坂憲雄

編集

# 物語という

物語の背後には、きまつて異界やそこに棲まう

モノらが蠢いている。異界とはときには死者たちの

棲む他界であり、桃源郷にも似た場所であり、日常の

領域のすぐ向こうに拡がっている悪所のごときものであり、

また、ときには精神の内界深くに隠されている

未知なる時空であるかもしれない。物語はそうした異界の

音すれ訪れに耳を澄ます者たちへのみ

聴こえてくる、幽かな異界からの言伝てである。

# 回路

新曜社



赤坂憲雄…編集

第II卷…物語という回路

蘇工業学院图书馆

藏 史層を  
掘る

新曜社

編著者紹介

赤坂憲雄（あかさか のりお）

1953年東京生まれ。東京大学文学部卒。評論家。専攻，日本思想史。

著書：『異人論序説』（砂子屋書房，1985年），『王と天皇』（筑摩書房，1988年），『山の精神史』（小学館，1991年）など。

＊思いがけず泉鏡花の世界にのめり込みそうな予感に，ひそかに怖れ戦っています。



＜叢書・史層を掘る＞II

物語という回路

---

初版第1刷発行 1992年4月1日©

編著者 赤坂憲雄

発行者 堀江 洪

発行所 株式会社 新曜社

〒101 東京都千代田区神田神保町2-10多田ビル

電話 (03) 3264-4973(代)・振替東京 2-108464

---

印刷 星野精版印刷

Printed in Japan

製本 イマキ製本

ISBN4-7885-0417-0 C1020

物語という回路

# I

物語としての

歴史

………この天皇制をめぐって

兵藤裕己

「早物語」という口承文芸がある。中世の奈良興福寺の記録に、座頭が「平家ならびに早物語」を語ったとあり（『経覚私要抄』一四七〇～二年）、近世の菅江真澄の紀行文にも、「めくらほうし」が「尼公物語」を語り、つぎに「小盲人」が「それ、ものごたり語りさふらふ」で始まる早物語を語っている（『はしわのわか葉』一七八六年）。

「それ、ものごたり語りさふらふ」の冒頭句は、いまも伝承される早物語のパターンである（新潟県北部、山形県庄内地方など）。「物語かたり候」で始めて（文語調に注意）、酒と餅の合戦物語など、およそ荒唐無稽な内容を早口で語る。語りだしと内容とのズレ——「物語」のパロディという点に「早物語」のおかしさがある。

「早物語」と対で考えられるのが中世歌謡の「早歌」だろう。歌のテンポが早いから「早歌」だが、それは宮廷の大歌（儀式歌謡）にたいして、非公式の歌い口という二

ユアンスがあつたと思う。「早物語」というのも、正式の「物語」にたいして「早物語」だ。もちろん正式の「物語」は、早物語のまゝに語られた「平家」の物語であり、義経主従にまつわる「尼公物語」。口承の「物語」は作り話や雑談を意味しない。信じられる語りごと、厳肅な歴史伝承のたぐいが「物語」と呼ばれている。

延宝八（一六八〇）年の仮名草子『囃物語』の序文に、

物語せんと申さるる程に、耳を澄し聞居たれば、思ひの外の戯言なり。さやうの  
ことを咄とこそいふなれ。……出所有事を物語といふなり。

「咄／物語」の対比が「たわこと／出所あること」の関係で捉えられている。ハナシ（話・咄・噺）という語彙は近世初頭に一般化した。根も葉もないハナシ、フィクションという思考は、近世以前には容易に存在しなかったらしい。はやくから例外的にハナシに近い言語行為をもち、民間のモノガタリという語を流用してフィクションを楽しんだのが平安の貴族社会である。モノガタリをフィクション・雑談とする平安時代語の用例だが、しかし平安時代語的な「物語」が、かなり特殊・例外的な物語のありようだったことには注意しておく必要がある。

たとえば、平安の作り物語。「物語の出で来はじめの祖」といわれた『竹取物語』は、話の段切れごとに語源解釈を付している。

……かの鉢を捨てて又言ひけるよりぞ、面なき事をば、はぢを捨てとは言ひけ

る。

……これをなむ玉さかるとは言ひはじめける。

……これを聞きてぞ、とげなき物をば、あへなしと言ひける。

……それよりなん、すこしうれしき事をば、かひあるとは言ひける。

各段の物語が、諺的な成句・成語の本縁譚として構成されるわけだ。また『伊勢物語』以下の歌物語は、『記・紀』、『風土記』などの歌謡説話の方法的な展開として成立する。古歌を伝承の核心部分として、そのいわれ・本説が「物語」として語られるのだが、とすれば「○○の物語」という書名も、「○○の本縁」、中世ふうにいえば「○○の本地」、「○○の本解」というのと同義だろう。古歌・古語・古事の伝承にもなう神話的本縁の語りが、モノガタリという語の古義だったようだ。

もちろん『竹取物語』の場合、成句・成語の本縁譚という形式は、落し噺ふうのパロディ化されている。『伊勢物語』が語る古歌の作歌事情も、しばしばこじつけめいていて、あきらかに笑話を意図したものが少なくない。ともに「物語」を称しながらも、物語をパロディ化した創作物語なのだが、とすれば、フルコトの本説・本縁譚としてのモノダカりは、平安の作り物語よりも口承のモノガタリ世界に、また「物語」が実質的に機能した説経・談義の場に受け継がれたといえようか。各話ごとに「――縁」の表題をもつ『日本霊異記』など、平安期以降の仏教説話集は、説経（経典のヨ

ミ説き）にともなう因縁・譬喩譚の類聚として成立する。それがたとえば『今昔物語集』と題されたことは、むしろモノガタリ原義を伝えるものだろう。

公的な語りごと（神話・正史）に対して、モノガタリは、私的・非正統的で、信じられることを期待しない自由な言語行為だといわれる。国文学プロパー（平安文学研究）では大方の認める意見だが、しかし中世の歌学・古典学の世界では、古歌の本説・本縁譚が「物語」と呼ばれている。仏典論疏類の講書の世界では、テクスト解釈に付随する本縁説話、談義に用いられる故事・先例譚のたぐいが「物語」と呼ばれる。そして「平家」の物語。平家の滅亡と源氏の興起、鎌倉的秩序の草創・起源にまつわる歴史的本縁の語りが「物語」と呼ばれる。

「物語」が現実の成立ちを説明し、中世的な世界認識の枠組みを形成する。たとえば、鎌倉末期に全国的に起こった反北条（反平家）の内乱が、それほど急速に新田・足利（ともに清和源氏）の傘下に糾合された理由は何なのか。さらに北条氏滅亡の後、内乱が（王政復古に終わらず）ただちに足利・新田の覇権抗争へ推移した事実をみて、「物語」がいかに当時の武士たちの動向を左右していたかがうかがえる。内乱が社会的・経済的な要因に起因したとしても、それは政治史レベルでは、ある共有されたフィクションの枠組みに沿って推移したのである。

小稿では、日本中世の「物語」について考察する。学問・注釈の世界で生み出され

た夥しい物語群については、他の執筆者が予定されていると思う。私が考えてみたいのは、政治世界のコンテクトとして機能した「物語」であり、すなわち武家政権の体制、その神話の起源を構成した「物語」である。結論の先取りめくが、近世・近代の天皇制は、『太平記』に作為された〈歴史〉の延長上に成立する。P・リクール<sup>\*1</sup>ふうにいえば、歴史とはすなわち物語であり、物語として共有される歴史が、あらたな現実の物語を紡ぎだしてゆく。

## 1 『太平記』と徳川政権

近世初頭に流行した太平記講釈の起源譚である。

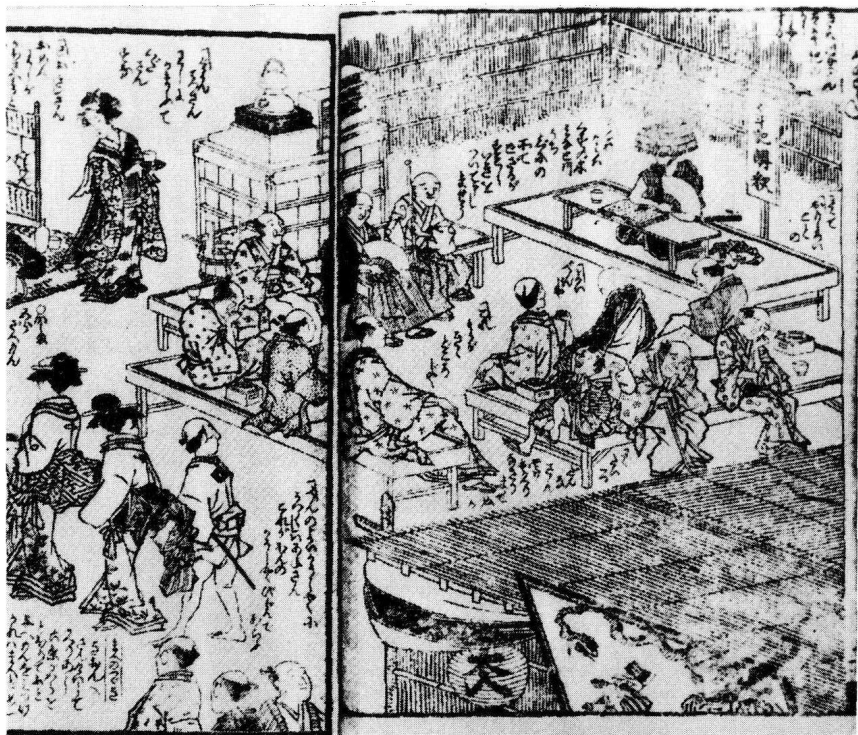
軍書講釈ノ始ハ、赤松法印トイヘル人、慶長ノ比、東照宮（注、徳川家康）ノ御前ニテ、太平記ノ講釈ヲ度々セシトゾ。

町講釈ノ始ハ清左衛門トイヘル者、浅草御門ノ側ニ高き所アリシガ、其上ニテ人ヲ集メ、是モ太平記ヲ講ゼシト云。

（『我衣』一八二五年）

「太平記ノ講釈」は、『太平記』成立の当初から行なわれている。それが「慶長ノ比」に始まったのでないことは明らかだが、しかし近世の太平記講釈のメルクマール

\*1 フランスの現代哲学者。巻末「若い人のためのブック・ガイド」参照。



▲浪人の太平記講釈 山東京伝作、歌川豊国画『累井筒紅葉打敷』文化六年刊(延広真治「江戸の寄席」『日本の古典芸能9 寄席』平凡社、一九七一年、から)  
 ▲太平記読みの物貰い(『人倫訓蒙図彙』元禄三年刊)  
 浪人の世過ぎ芸として、「太平記よみ」と「さるまわし」が対で描かれる。「太平記よみ」の解説に、「太平記よみての物もらひ、あはれむかしは畳の上にもくらししたればこそつりよみにもすれ、なまなかかくてあれよかし、祇園の涼、糺の森の下などにては、むしろしきて座をしめ、講尺こそおこりならめ」とある。

として、とくに「慶長ノ比」が記憶された意味について考えたい。「慶長」といえば、家康の江戸開府にはじまり、秀吉の死（慶長三年）、関ヶ原合戦（同五年）を経て、大阪の陣（同一九・二〇年）で終わる家康の天下取り（豊臣氏の滅亡）を象徴する年号である。そのような「慶長ノ比」に、家康が「度々」「太平記ノ講釈」を聴聞したということ、また、それと拮抗するかのようには、「浅草御門ノ側」で（つまり大道芸として）太平記講釈が行なわれた、という所伝に注目してみたい。

まず、家康の『太平記』享受から思い合わされることは、「慶長」年間の家康が、清和源氏新田流を称したという事実である。慶長八（一六〇五）年三月、征夷大將軍拜任のために上洛した家康は、朝廷で「新田殿」と呼ばれている（『お湯殿上の日記』慶長八年三月二五日）。「新田殿」と呼ばれることが、足利將軍に代わる大義名分でもあったのだが、「新田殿」家康にとって、新田氏の事績にくわしい『太平記』は自家の由緒譚、「家の歴史」としての意味をもつものであった。

徳川氏が、もとは北三河の土豪松平氏であり、松平氏の本姓が賀茂姓であつたことは、史料的にも確認されている（葵の紋についても、ふつう賀茂姓から説明されている）。その賀茂姓松平から、徳川に改称した時期は、永禄九（一五六六）年正月、家康が従五位下三河守に叙任されたときといわれる。<sup>\*2</sup>

伝奏をつとめた近衛前久の書簡によれば、家康が朝廷に提出した系図は、「源家に

\*2 中村孝也『徳川家康文書の研究』上、一九六〇年、同、徳川家至文堂、一九六一年。

て二流のそりやうの筋に藤氏に罷成」というもの（近衛信尹宛「將軍家准摂家徳川家系図事東宮院殿御書」。「二流のそりやうの筋」は、「源家」の嫡流とされた足利・新田の二流である。また「藤氏に罷成」は、もとは源氏で、いまは藤原氏ということ。以後の家康は、「藤原家康」、「源家康」の署名を適宜つかい分けているが、それが清和源氏新田流に確定するのは、「慶長」年間、家康が征夷大將軍に叙任される直前の時期であつた。近衛前久の書簡は、永禄年間の系図作成の話につづけて、

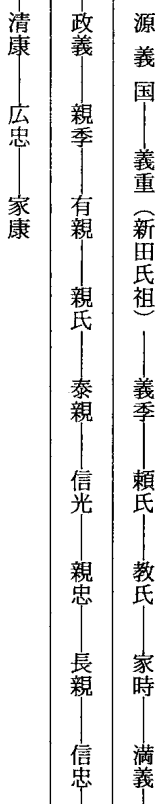
……只今は源氏に又氏をかへられ候。只今の筋はふしのすちにて、その筋を如雪と申候物申候ハ、將軍望ニ付候ての事候、と申候。義国よりの系図を、吉良家より被渡候事候。永々敷子細不入事に候へ共、御存じのためにて候。

という裏話をあかしている。家康が「將軍望ニ付」、藤原氏から「源氏に又氏をかへ」というのだが、そのさい、「義国よりの系図を、吉良家より被渡候」とあるのは注意されてよい。源義国は八幡太郎義家の子、新田・足利両流の祖先だが（新田氏初代義重、足利氏初代義康は、ともに義国の子）、その「義国よりの系図」を、「將軍望ニ付」「吉良家より被渡」たというのは、徳川幕府の起源にかかわる重大秘事であつた。

赤穂事件のかたき役として著名な吉良家は、足利長氏（足利氏三代義氏の嫡男）を初代とする足利一族の名門である。足利將軍に世継ぎのない場合は、まず吉良家から入って継ぐといわれ、すでに足利本家が滅んだ慶長年間には、吉良家は足利將軍の名

跡を伝える唯一の家筋である。その吉良家から、「義国よりの系図」つまり源氏の嫡流系図が家康に譲渡されたとは、ある種の服属儀礼を意味するだろうか。源氏將軍家の「そうりやうの筋」が、系図の移譲とともに、足利から徳川（新田）へ継承されるのだが、とすれば、近世の吉良家が高家筆頭職（幕府の儀典係の筆頭）に任じられたことも、服属した前王朝のゆかりが、現王朝の儀礼・祭祀にあずかるというパターンを想わせる。元禄一五（一七〇二）年の討入り事件によつて断絶に迫り込まれた吉良家とは、徳川氏の將軍職継承にかかわり、幕藩体制という制度の起源に関与した家柄であつた。

ともかく吉良家から源氏の「そうりやうの筋」を継承した「新田殿」家康は、慶長八年に征夷大將軍に叙任される。慶長一四年四月、家康が神龍院梵舜に命じて刪定した『尊卑分脈』には、清和源氏系図に、つぎのような増訂がほどこされる。



源義国の子義重は新田氏の祖。義重の四男義季が、上州得川に住んだ得川氏（家康の代に徳川）の初代だが、得川氏二代の頼氏以下が、梵舜による増訂部分である。な

かでも、上州得川氏と三河松平氏とをつなぐ六代政義から十代泰親までは、近世の徳川氏関係の文書にしかみられない。ともかくこの系図によつて、天皇に代々「忠孝」を尽くした新田・徳川氏の由緒が確定する。その由緒によつて、家康はあらたに、源氏の「そうりやうの筋」を継承する。つまり足利氏に代わつて、天皇から「家職」としての征夷大將軍に叙任されるわけだ。

## 2 源平交替の物語

ところで、家康が「新田殿」を称したことには、足利氏に代わるという以外に、もうひとつ、織田氏のあとを意識したことがあつたろう。本姓藤原を称した織田氏は、信長が上洛して足利十四代將軍義昭を追放する元龜・天正頃には、桓武平氏を称している。『統群書類従』巻六上の『織田系図』は、壇の浦で入水した平資盛の次男親真を「織田元祖」とするが、もちろん信長が桓武平氏を称したのは、清和源氏・足利流に代わるためである。源平交替の論理だが、その桓武平氏・信長の後継者であるためにも、家康は清和源氏を称する必要があつたろう（なお、家康の念頭には、豊臣氏の後継という意識はなかつたと思われる。秀吉は織田氏の陪臣であり、しかも彼が藤原姓

を称して関白になったことも、家康の武家政権の継承觀念からは外れていたと思われる。

源平両氏が交替で覇権を握るという認識は、いうまでもなく、平安末期の保元・平治の乱にはじまり、治承・寿永の乱にかけて形成された歴史認識である。しかし内乱の複雑な過程を単純化し、それを源平交替として図式化して捉えたのは『平家物語』であった。『平家物語』が（諸本によって程度の差はあるにしても）基本的に源平交替史として構想されることは周知だが、そのような源平交替の物語は、源氏将軍三代のあと、北条氏が桓武平氏を称したことで、以後の歴史の推移さえ規定することになる。北条氏の政権を継承するのは、清和源氏足利流であり、その清和源氏を駆逐した織田氏は桓武平氏、さらに織田氏の跡を継いだ徳川氏は清和源氏新田流を称している。『平家物語』の図式が、武家の政権交替における大義名分ともなるのだが、しかし『平家物語』の源平交替史で注意すべきことは、交替で覇権を握る源平両氏は、けっしてそれ自体は統治権の主体になりえない、という点である。たとえば、『平家物語』の冒頭ちかく、源平両氏を位置づけて、

昔より源平両氏朝家に召仕はれてより以来、皇化に随はず朝憲を軽んずる者をば、互に誠めを加へしかば世の乱はなかりき。

（『源平盛衰記』巻第二「清盛息女事」）

とある。「朝家に召仕はれ」て、朝憲・王法を軽んずる者に「互に誠めを加へ」るのが源平両氏だが、そのような源平両氏の位置づけに対応して、延慶本（『平家物語』諸本のなかでも古態といわれる）の末尾は、内乱の勝者、源頼朝を次のように位置づけている。

抑征夷大將軍前右大將（注、頼朝）惣て目出かりける人也。西海の白波を平げ、奥州の緑林をなびかして後、錦の袴をきて入洛し、拜賀の儀式希代の壯觀也き。仏法を興し、王法を継ぎ、一族の奢れるをしずめ、万民の愁を宥め、不忠の者を退け、奉公の者を賞し、敢て親疎をわかず、全く遠近をへだてず、ゆゝしかりし事共也。

（延慶本第六末「右大將頼朝果報目出事」）

頼朝の功績は、朝廷にたいして「不忠の者を退け、奉公の者を賞し」た行為とされる。こうした認識を前提として、鎌倉幕府の草創という事態も、頼朝の「仏法を興し、王法を継ぎ」た行為として、つまり旧来の王権的秩序の回復として位置づけられる。東国の新政権（というより新国家！）の誕生という現実が、「朝家のかため」たる源平両氏の交替として矮小化されるわけだが、もちろんそのことは、『平家物語』の編纂の位相を暗示している。

『平家物語』の編纂が、比叡山（延暦寺）周辺で行なわれたこと、<sup>\*3</sup>とくに天台座主慈円が、その成立になんらかの形で関与したらしいことは、『徒然草』二二六段の伝承

\*3 具体的な成立の場として、慈円が建久二年に建立し、翌年後鳥羽院の御願寺となった大徳院が注目されている（筑土鈴寛「平家物語についての覚書」著作集一巻、せりか書房）。大徳院では、「保元以後乱世」の「怨霊」慰鎮によって、「朝家」の「扶助」、王権（具体的には後鳥羽院政の「安穩泰平」が祈念される（慈円「大徳院起請条々事」の発願文）。なお、平家一門の祟りが恐れられた鎌倉初期において、平家怨霊の慰鎮を国家的レベルで要請された寺院は、やはり「王城の鬼門（東北）」に位置して、創建当初から「鎮護国家の道場」（延暦寺護国縁起）を自認していた比叡山延暦寺であったろう（拙著『王権と物語』青弓社、一九八九年、第二章）。

——「後鳥羽院の御時」「慈鎮和尚（慈円）」の扶持した「信濃前司行長」が「平家物語」を作りて云々」とする伝承——からうかがえ、また、『平家物語』が山門の動向に\*4くわしいこと、慈円の『愚管抄』と密接な同文関係が指摘されることから傍証される。たとえば、『愚管抄』巻五は、壇の浦合戦による宝剣の喪失という事態に関連して、つぎのように述べている。

抑コノ宝剣ウセハテヌル事コソ、王法ニハ心ウキコトニテ侍ベレ、コレモコヽロウベキ道理サダメテアルラント案ラメグラスニ、コレハヒトヘニ、今ハ色ニアラハレテ、武士ノキミノ御マモリトナリタル世ニナレバ、ソレニカヘテウセタルニヤトラボユル也。ソノユヘハ太刀ト伝フ剣ハコレ兵器ノ本也。コレハ武ノ方ノヲホンマモリ也。……今ハ宝剣モムヤクニナリヌル也。高倉院ヲバ平氏タテマイラスル君ナリ。コノ陛下ノ兵器ノ御マモリノ、終ニコノリカクウセヌル事コソ、アラハニ心エラレテ世ノヤウアハレニ侍レ。

「武ノ方ノヲホンマモリ」の宝剣が失われたのは、今は武士が「キミノ御マモリトナリタル世ニナレバ」「宝剣モムヤクニナリヌル」ゆえとされる。かつて平家が「高倉院」の「マモリ」となったように、それに代わる後鳥羽院の「マモリ」として源氏鎌倉幕府が台頭した。それは「王法」（後鳥羽院政）の「マモリ」ではあつても、けつして「王法」と対立する存在ではありえない。ましてや「王法」とは無縁に存在する

\*4 赤松俊秀『平家物語の研究』法蔵館、一九八〇年、ほか。